

### 1 自己評価及び外部評価結果

**【事業所概要(事業所記入)】**

事業所番号	4590100212		
法人名	有限会社 美大		
事業所名	グループホーム大河	ユニット名	大河
所在地	宮崎県宮崎市古城町長田5911番地		
自己評価作成日	平成24年10月1日	評価結果市町村受理日	平成24年11月20日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.jp/45/index.php?action_kouhyou_detail_2010_022_kani=true&amp;JigyosyoCd=4590100212-00&amp;PrefCd=45&amp;VersionCd=022">http://www.kaigokensaku.jp/45/index.php?action_kouhyou_detail_2010_022_kani=true&amp;JigyosyoCd=4590100212-00&amp;PrefCd=45&amp;VersionCd=022</a>
----------	---

**【評価機関概要(評価機関記入)】**

評価機関名	社会福祉法人宮崎県社会福祉協議会
所在地	宮崎市原町2番22号宮崎県総合福祉センター本館3階
訪問調査日	平成24年10月25日

**【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】**

①利用者との日々の会話の中から情報を把握し、一人ひとりが本人らしく生活できるように、利用者主体で支援できるようにしています。利用者の人格を尊重し、言葉遣いや介助時の対応については、プライバシーを十分に配慮し、支援を行っています。  
 ②身体拘束・高齢者虐待について学ぶ機会をもうけ、全職員が身体拘束・高齢者虐待を理解しています。日中は、玄関に鍵をせず、センサーで対応しています。利用者の外出や御家族の来訪は自由です。  
 ③わが家は、祖父母を囲んだ3世代が食卓に集い、昔話に花咲かせ、童謡に親しむ毎日の暮らしがあります。あの大家族時代の支えあい、肩寄せあう、裸電球の温もりのある営みがあります。

**【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】**

今年2月に開設した2号館と、5年目を迎えた1号館からなるホームは、のどかな田園風景の広がる環境の中にある。太陽光発電装置、スプリンクラー、AEDの設置、オストメイト対応トイレやボタン一つで全職員の携帯につながる防災装置など、最新の機器が整っている。職員は、利用者の情報をしっかりと共有し、その人にあったケアに取り組み、1号館・2号館の協力体制も十分取れている。また、地域との交流も良好で、小学生が行き帰りに声をかけたり、中学生の福祉体験の場にもなっている。保育園の納涼祭や運動会に参加したり、地域の水掛け地蔵祭りに参加したりと、利用者が楽しく過ごせるよう積極的に取り組んでいる。

**V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します**

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,19)
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らさせている (参考項目:28)		

## 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	大河	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	地域に根ざした明るく楽しいホームづくり等、職員は理念を理解し、日々実践の中で取り組んでいる。		理念を書いた紙が、トイレを始めホームのあちこちにはってあり、勤務交代申し送り時には、毎回、理念の唱和を行い、実践できているか確認している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	古城保育園や大塚台ふたば保育園の行事に招待を受けている。古城小児童との朝夕の挨拶や、古城地区の神楽等の行事に参加する等の交流を行っている。		自治会に加入しており、夏祭りや神楽、一斉掃除にも参加している。散歩の途中、気軽に声を掛け、野菜などを頂くこともある。小学校のマラソンには、自分たちで旗を作り、応援している。近ごろは、介護の相談も持ち込まれている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	県看護師協会やヘルパー実習の受け入れ、及び中学生の体験実習を受け入れて、認知症の方の理解や支援方法を伝えている。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では、苦情・要望・意見の表出を促し、出された意見等は、職員会にも報告して、可能な限り実行している。苦情・要望は、ホームがより良くなるための教科書と理解している。		会議は2か月に1回、定期的で開催されており、意見の出しやすい雰囲気作りに努めている。利用者も一緒に、家族の隣でお茶を飲みながらの会議である。出席者からの質問などは、後日まとめて全員に封書で送付している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	事業主が、市の元職員であり、市との連携は密にとれている。運営推進会議にも、市職員に出席してもらい、アドバイス等をいただいている。		市の担当者には、毎回、会議のメンバーとして出席してもらい、また、ホームからも定期的に出かけており、日ごろから協力が得られる関係に努めている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	7時から19時までは施錠せず、敷地入口の門扉は、24時間オープンである。		職員会議で具体例を出したり、新人は外部の講習に参加している。センサーはあるが、鍵はどこもさされておらず、窓も開け放たれている。不穏な方には、居場所を気にかけて、目をかけ、手をかけ、落ち着くまで散歩するなど、努めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修や職員会議等で、他施設や家庭内での虐待の事実を知り、皆で考え、ホーム内での虐待防止に努めている。			

自己	外部	項目	自己評価	大河	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度や権利擁護に関しては、職員会議で、事業主が講師として研修を行った。また、家族会でも説明し、支援する旨を伝えている。			
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には十分に説明をし、ゆっくりと読んで頂く時間を作っている。不安や疑問等がないか尋ね、理解を得た上で契約している。			
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面接の折、現在の状態をお伝えするとともに、要望、意見、苦情等をお聞きしている。苦情、不満が出された場合は、職員会議で検討、協議の上、解決策を見出している。		日ごろから、家族とのコミュニケーションに心がけている。各居室の入り口に、家族連絡ノートがあり、双方向の密なやりとりがある。また、玄関に家族から出た意見等の改善ファイルが置いてあり、誰でもいつでも見ることができる。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日々の仕事や職員会議で意見を出し合い、気になる事は、何でも話し合える雰囲気を作っている。		日ごろから、経営者が職員と世間話をするなど、意見の出しやすい雰囲気である。職員会議では、ブレインストーミング法(集団発想法)を使い、多様な意見が出るようにしており、一例として、2号館に畳敷きの場所ができている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	労働時間や希望休等の要望は受け入れられ、経営者と職員の話す機会も多くあり、働きやすい環境である。			
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員の経歴や実績に応じて、各種研修に積極的に参加している。新たな資格を得た場合は、手当で遇されている。			
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	医療機関が経営するグループホームと、相互訪問等の交流を図っており、意見交換している。長所は積極的に取り入れるようにしている。			

自己	外部	項目	自己評価	大河	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	在宅や病院からホームに入所される方がほとんどなので、利用されてからの相談が主となる。不安な事、生活面で困っている事などをよく聴き、力になれるよう努めている。			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所される前、された後と、家族や本人の希望や生活面での希望等をお尋ねし、受け止めている。家族との連携は密にとれていると思う。			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	利用者の個人の状態をよく観察し、本人や家族と協議した上で、必要なサービス(訪問看護・訪問マッサージ・往診等)を取り入れ、サポートしている。			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は、利用者それぞれの得意分野で、その人らしさを出せるように支えている。調理のアドバイスや裁縫を習う等、生活の知恵を利用者の方から学んでいる。			
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	職員は、家族との連携を密にし、家族と共に、介護させていただく関係作りを築きあげている。			
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	親交のあった人を家族に伺い、訪問をお願いしている。また、本人が希望される場所に、外出することに努めている。	地域の行事に参加したり、家族や友人、知人の来訪があり、お盆などは、一族総出でにぎやかである。昔からなじみの美容室に行く方や兄弟のお見舞いに家族と行かれるなど、利用者にあった支援をしている。		
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	ホールにて、よく利用者同士が助け合ったり、励まし合う姿が見られる。職員は、パイプ役として支援し、良好な関係が築かれている。			

自己	外部	項目	自己評価	大河	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後に、職員を訪ねて来てくださった家族がおられ、相談や支援の他、行事参加の呼びかけを行い、これまでの関係性を大切にしている。			
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常的な会話の中から、本人の希望や意向を聞き、本人の思いに添えるように努めている。意思表示が困難な方は、以前の行動パターンや表情を読み、適宜サポートしている。	センター方式(認知症の人のためのケアマネジメント方式)を全利用者に活用している。失語症の方など、意思疎通の難しい人は、日ごとの行動パターンや表情、仕草、ジェスチャーで気持ちをくみ取り、体調の変化にも気をつけている。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人及び家族、入所前の施設等から、できるだけ多くの情報を集め、生活環境やこれまでのサービス利用の経過等の把握に努めている。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	各利用者の個別日誌により、職員の細かい観察などで、総合的に把握していくように努めている。毎日、お手伝いをして下さる利用者も数多い。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者ごとに担当を決め、毎日の記録や気づきの中から、職員会議やカンファレンス、ミーティング等で検討、見直しを行っている。	モニタリングは毎月行っている。利用者ごとの各担当者を中心に、記録日誌や本人、家族の希望、要望を聞きながら、見直している。本人の意見や行動は、その裏にある本質の部分をしっかりと注意深く考えて、見直しに反映している。		
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	職員は、仕事を終える直前まで、個人の様子を個別日誌に記入し、変化がないか、実践や介護計画の見直しの必要性がないか考え、次のケアに活かしている。			
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	経験豊富な看護師、ケアマネージャー、介護スタッフが徹底した検討を行い、既存のサービスに捉われない柔軟な支援、サービスに取り組んでいる。			

自己	外部	項目	自己評価	大河	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	赤江東中学校の体験実習の受け入れ、古城保育園との交流等を毎年行っており、利用者にとって良い刺激になっている。 車の少ない農道等での散歩で、自然を肌で感じてもらっている。			
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	家族の希望により、内科や歯科の往診が入るようになり、職員も安心して介護を行えるようになった。急変時の往診も可能であり、連携は密にとれている。	掛かりつけ医との連携は、密にとれている。受診時に、家族付き添いの場合は、独自の情報提供書で詳しく状態を伝えており、受診結果も文書で返ってくる。内科、外科だけでなく、眼科、皮膚科、整体師の往診もある。		
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職員は、利用者の状態を日々観察し、いつもと状態が違う時は、看護師に報告し、適切な指示を受け、受診等に至っている。			
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	定期の受診や往診の際、日々の記録から状態を伝え、アドバイスを受ける等、病院関係者との情報交換や相談に努めている。			
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期を迎えた利用者は、現在はいないが、看取りに備え家族や本人の希望に沿った生活ができるよう、検討は行っている。	これまでに看取りを行ったこともあり、方針は文書化されている。段階的に話し合い、本人や家族の希望に沿った支援ができる体制がある。		
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	事業所にAEDを設置し、使用方法を動画で観ながら研修を行った。また、消防局の行う救急の研修にも参加し、体得している。			
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	毎月、防火管理者の指導の下、避難訓練を行っている。地域の消防団と提携書を交わし、緊急時の応援をいただく事になっている。	年に2回は、消防署参加の避難訓練を行っている。スプリンクラーや消防ホース、声による避難誘導装置やボタン一つで全職員の携帯に連絡できる最新装置などが整っている。また、消防ホースを使う水源提供の了承ももらっている。	最新の機器に頼ることなく、それらが使えない時を想定した訓練や夜間の避難訓練の向上に期待したい。地域住民や消防団の参加、備蓄品の充実にも、これまで以上に期待したい。	

自己	外部	項目	自己評価	大河	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉かけや行動には十分な注意を払い、尊厳やプライドを傷つけないように対応している。 プライバシーの保護にも、十分意を払っている。		利用者のプライドに配慮し、昼の申し送り時には、名前でなくイニシャルで話すようにしている。おむつ交換も扉を閉め、バスタオルを掛け、十分配慮している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	援助の前に、利用者の希望をお尋ねし、その思いに添った介護を行っている。個人のペースに添ったケアが行われている。			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	起床時間や食事、睡眠時間と、一人ひとりのペースは様々であり、その方のペースを崩すことなく、希望に添ったケアを行っている。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	散髪は、出張カットの業者に依頼したり、利用者の希望により、職員がカットや白髪染めを行っている。			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	行事の中に、希望のおやつ作りやメニュー等を取り入れ、利用者が主役となり、職員と一緒に準備や食事の片付けをしている。		職員は、利用者と同じテーブルで、支援をしたり、会話をしながら、同じ食事をしている。メニューは決まっているが、リクエストがあれば、その日に変更することもある。利用者は、料理作りや片づけなど、自分にできることで参加している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎日記入する食事や水分チェック表で、一人ひとりの状態を全職員が把握できるよう工夫されている。好き嫌いの食事メニューもあるため、別の物を作り、出すなど、個人個人に合った食事が提供されている。			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の歯磨きの声掛け、誘導介助を行い、口腔内の清潔が保持できるよう支援している。異常が見つかった場合は、家族や訪問歯科医に相談や指導を受けている。			

自己	外部	項目	自己評価	大河	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	毎日の排泄チェック表により、個人の排泄パターンを知り、トイレの声掛け誘導を行っている。		排泄チェック表を分かりやすく記録して、間隔やパターンをつかみ、トイレ誘導を行っている。リハビリパンツから布パンツやパットになった方、家族ノートからの要望で、短期目標にトイレでの排泄つを入れ、失禁パンツで過ごせるようになり、大変喜ばれている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘予防に、ヨーグルトを毎朝出している。運動を取り入れたり、食物繊維の多い食べ物を調理で使うなど、工夫も行っている。			
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	利用者の希望により、14時頃から入浴される方や夕方に入られたりと、その方に合わせた入浴時間になっている。		希望があれば、いつでも入浴でき、就寝前の入浴もできる。毎回、必ずお気に入りのひげそり上手な職員を指名して、入浴される方もいる。浴槽は、両側から介助できるようになっており、リフトも付いている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中のレクリエーション、散歩等で、適度な疲れを感じてもらい、安眠につなげている。不安や心配事から眠れないような時は、傍に寄り添い、話を傾聴して、安眠につながるよう支援している。			
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の情報を文書で薬局から貰っており、薬の効果や副作用について理解している。服用後、気になる点があれば看護師に相談し、医師に調整してもらうなど、十分な支援が行われている。			
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	毎日の日課として、洗濯物たたみ、食事の配膳、下膳、テーブル拭きやお盆拭きと、利用者の方が自ら積極的に手伝って下さり、それが生きがいとなっている。			
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	利用者の希望をお聞きし、文化公園や買い物、ドライブ等へ出かけている。散歩に行きたい方は、業務中でも一緒に付き添い、楽しく会話しながら出かけている。		どの居室にもウッドデッキがあり、体調や気分に合わせて、日常的な外気浴が可能である。買い物やドライブも楽しんでいる。同じ経営母体の3つのホームの全職員、全利用者、家族で、温泉に行くのも利用者の楽しみとなっている。	

自己	外部	項目	自己評価	大河	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	本人がお金を持ちたいと希望されたら、家族と話し合い、所持されている。それ以外の方は、事務所の金庫に保管してある。			
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人からの申し出があれば、家族や友人に電話できるよう、サポートしている。			
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室南側には、ウッドデッキがあり、散歩や運動をされる方や利用者同士、ウッドデッキの椅子に座られ、四季折々の会話が聞かれる。		ホールには、利用者に生けてもらった季節の花と一緒に作った折り紙、古布で作ったタペストリーなど、心和む物を飾っている。また、温度計や湿度計もあり、心地良く過ごす工夫を行っている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	居間にはソファがあり、利用者同士でゆったりとくつろがれている。 ウッドデッキや玄関には、椅子が置かれ、独りの時間ももてるよう、配慮されている。			
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入所前に、家族や本人に馴染みの物、タンス、アルバム、仏壇等を持ち込んでいただいている。お盆の時期には、榊、供え物を職員が準備し、一緒に手を合わせ供養すると、涙を流して喜ばれていた。			
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	室内は、バリアフリーとなっており、廊下やトイレ、浴室と、手すりが設置されている。車いすの操行訓練や立位訓練、歩行訓練を個別で行い、機能低下防止を図ると共に、本人の意欲につながるよう支援している。			